身近な地域の問題を見つけよう

― 社会的な見方・考え方を使って ―

１　単元のねらい

・　直接経験地域の地理的事象を学習対象として，観察や調査などの活動を通して，身近な地域に対する理解と関心を深める。

・　市町村規模の地域の調査を行う際の視点や方法を身に付ける。

２　授業の構想

⑴ 子どものとらえと資質・能力について

生徒は，H28年度夏休みの宿題として，フィールドワークを行い「身近な地域の問題」を発見している。生徒の見つけた代表的な松江市の問題は以下のようである。

○氏神神社の氏子が減っている。観光地になってない神社なので維持が難しくなってきている。
○自動販売機が地域にある。しかし道幅が狭い箇所に設置してあり，ジュースを買う人があると，道幅は１ｍを切り，交通事故が起こりそうな箇所が数カ所ある。
○市街地の商店街に活気がない。一方，郊外にスーパー等があり，人や自動車が多く，活性化している。
○人口減少の結果，空き屋が増えている。しかし，駅が近いため地価は高いので，商業用地として売れ，人口増加につながらない。

さらには，「身近な地域の調査」の夏休みの問題を終えて，次のような振り返りをしている。

○今まで氏子神社は，知っていたが，あまり興味はなかった。今回の観光客を調べてみて，神社ですら経営が難しいという事実があることがわかった。興味をもちたい。
○自動販売機は，必要だ。しかし，市内では安全が確保できない箇所もある。私では解決できな問題を，どうすればよいのか。
○郊外ばかりが発達すると，高齢者とか買い物に行けない。商店街復活のきっかけになるようなことはできないのか考えたが名案が浮かばない。
○このまま空き屋が増えてくると防犯上も問題だし，町に活気がなくなり，人口減少のため，自治的活動ができなくなる。

このように夏休みの宿題として行う身近な地域の調査は，自分の興味・関心，趣味などからテーマを設定することが多い。さらに，フィールドワークをしているため，問題を自分のこととして捉え，解決する意欲が高くなる。そこで，一人一人の問題を本校の総合的な学習の時間「住みたいまちプロジェクト～ふるさとの明日を創ろう～」で活用している６領域（環境・生活・観光・教育・福祉・ものづくり）に分類する。そして，自分の領域の見方で他の領域の地域的問題を見直し，今まで関係ない問題と思っていたことが，案外，解決の糸口につながる考え方を身につけたい。結局，どのような街を創りたいかにより，地域の本質的な問題や問題の優位性は違ってくるので，理想の街を掲げ，創造する姿を期待したい。

⑵ 資質・能力を育むために

本単元では，問題解決能力（社会科部では，「社会的な見方・考え方を働かせながら，問題解決をする力」）を育成するために，社会的な見方・考え方を使って，地域の問題に対する自分の関わり方を追究する姿を大切にする。自分の問題だけでは解決が難しいことを，他者の問題領域で見つめ直し，自分の問題の解決の糸口をつかめるようにしたい。そして，３年生で実施される総合的な学習の時間「住みたいまちプロジェクト」につなげ，社会的見方・考え方を広げ深めていく。学習指導要領では，直接体験地域の調査を，次のように行うこととしている。

○自分たちの観察や調査の活動を通じて資料をつくり，それをもとに地域の問題を見いだし，考察する。

○生活に関わる地域の問題を見いだし，その要因を分析したり問題の所在や将来像を提案したりするなど，互いにその問題について意見交換をはかる。

３　展開計画（全７時間）

次	時	主な学習と具体的な学習・内容	◇願う子どもの姿
1		○夏休みの問題の発見 ・自分のテーマに合ったフィールドワークをして，自作の地図　を根拠にして身近な地域の門愛を見つけよう。	◇自分の興味・関心，趣味を生かして意欲的にフィールドワークする姿。
2	1	○問題の表現 ・自分がフィールドワークで見出した「身近な地域の問題」を，３分間のプレゼンができるようにプレゼン資料を作り，発表する。問題のない生徒も，ここで問題を作成する。	◇相手に主旨が伝わるようなプレゼンを作る姿。
	2	○自分の問題が松江市の問題になることの証明 ・問題の位置的・時間的な広がりを文献，統計・資料から調べて，松江市の問題でもあることを明らかにする。 ・地形図，主題図を読み取る技術を学び，自ら見いだした問題が松江市の問題であることを明らかにする。	◇自分の見いだした問題に対して，現状を把握しようとする姿。
	3	○問題の把握 ・自分がフィールドワークで見出した「身近な地域の問題」に対して，どのような解決策が行われ，どのような効果があったか調べる。その上で，現実に松江市の問題として残っているのか経験知，文献やHPなどで検討する。	◇資料や統計，地図を裏付けされた自分の考えをもとうとする姿。
	4	○問題の解決 ・グループの中で，「住みたいまち」とは，どのような街なのか。自分の問題の解決策を意識しながら１つ考える。グループで 「住みたいまち」を決める。	◇「住みたいまち」を創るために，自分の根拠を発表し，グループで「住みたいまち」を考えようとする姿。
	5	○問題の具体的解決 ・グループの中で，「住みたいまち」を創るために，自分の問題と他者の問題を合わせて，効果的な解決策がないか協働的に模索する。	◇自分の問題の根拠を他者に説明し，他者の問題の根拠を聞き，効果的な解決策を導き出そうとする姿。
	6・7	○ふりかえり ・「住みたいまち」を創るために，どのような社会（例：市役所，島根大学・・）と関わり合えば実現できるか	◇一連の学習活動をポートフォリオにして，冊子にして記録する姿。

		考える。相手を説得できるプレゼン（統計・資料を活用）を作り，学習内容　をふりかえる。	

4　授業の実際

(1) 問題解決能力を育成するための具体的なはたらきかけや手立て（◆）

（展開例）

学習場面と子どもの取組	教師の支援と願い・評価
1．「住みたいまち」と自分の問題の確認 ・「住みたいまち」は，各自，ポートフォリオの表紙に記載し，問題のプレゼンとポートフォリオを机上の置く。	・ミニホワイトボードに，プレゼンの手順のような進行表を書く。
2．身近な地域の問題の解決をする。（◆） ・グループの中で，自分の問題と他者の問題を合わせて，今までと違った社会的な見方を使い解決方法を協働で考える。	◆グループ内で，違う問題であっても，今までと違った見方を使うことで解決へつなげるよう声がけする。 ・「例えば・・・」「地図を比較すると・・・」と今まで調べた解決の根拠を説明するよう指示する。
3．解決策を発表する。 ・「住みたいまち」づくりに，どのように関わることができるのか地図，統計・資料，インタビューや事例などで根拠を示しながら，わかりやすく発表する。	・学級全体に根拠と解決策がわかりやすように，解決策をミニホワイトボードへ，補助資料を実物投影機などで提示し，プレゼンするように声がけする。

解決策を様々な立場から捉え，「なぜ，そう思うのか。説明してほしい。」と意見交換することは自分の解決策を広げたり，深めたりする。その時に，思考を可視化する手立てとして大小２種類のホワイトボードを使用する。小には，自分の考えを書き，相手に伝わりやすいようにした。大には，グループとしての意見を共有する目的で使用する。そして，様々な立場を尊重する公正さ，また効率さをもって，解決策を判断することが合意形成する上で大切であることを板書し，生徒の思考の手助けをする。

(2) 教科構想と授業の構想との関連

【生徒Ａの問題点】
　玉造の観光客は増えているが，まだまだ知られていないスポットがいっぱいある。それを日本の方々はもちろん，外国の方々にも知ってもらい，観光客を増やしていきたい。

これは，夏休みにフィールドワークをした結果，生徒自身が見つけ出した地域的問題である。社会的な見方・考え方を使って，身近な地域の問題を導き出している。さらに自分のくらしにつながっていると考えている。そして，主体的な学び，対話的な学び，深い学びができるように，以下のような手立てを考え実行した。

(1) 社会的な見方・考え方を獲得するための工夫

生徒Ａは，自ら考えた問題が本当に松江市の問題なのか，資料をもとに整理した。

私がずっと玉造に住んでいて感じることは，観光客の方に場所をよく聞かれるということです（駅，旅館，神社の場所など）観光地が多いのはよいことですが，観光客の方が分からないのは大きな問題だと思います。～中略～より長く滞在してもらい，そこで得た資金で玉造をもっと活性化したいです。そのために魅力を伝えるマップやウェブを作るといいです。

このことを市役所の職員に知らせるために，様々な資料を用意した。資料を用意する際には，様々な見方・考え方を取り入れ，どのような資料を用意すれば，自分の問題を職員に伝え理解してもらうことができるか考えた。このような活動を通して，社会的な見 方・考え方を獲得したと考える。右の図１は生徒Ａが選んだ資料の一部である。

５．観光客の情報源
（アンケート　H27）
○友人等の口コミ　28.9%
○インターネット　25.8%
○パンフレット　14.8%

（図１：観光客の情報源）

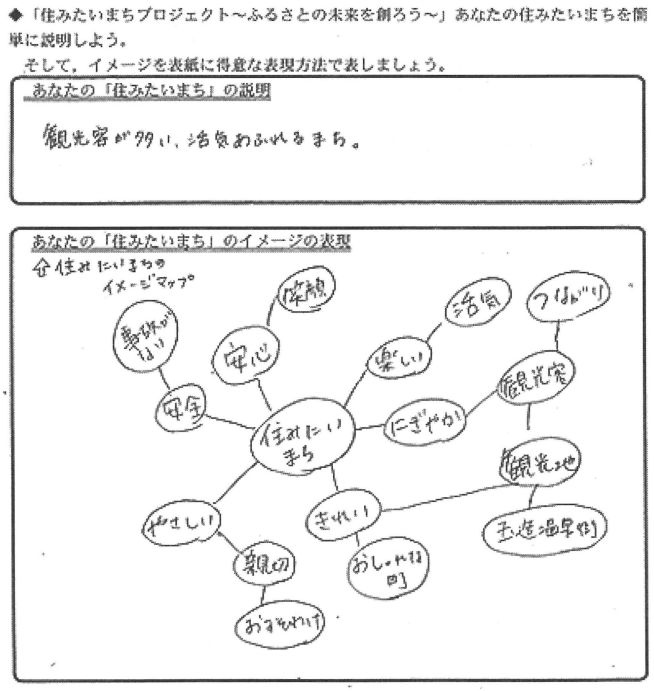
⑵ 思考の可視化のための工夫

生徒Ａは，フィールドワークによって身近な地域の問題を見つけ出した。そして，どのようなまちを創りたいのか考えた。「観光客が多い，活気あふれるまち」をイメージした。思考の可視化をするため，イメージマップを作成した。この後，グループで住みたいまちについて対話する場面があり，こうした対話を通して自分の考えを客観視できた。

⑶ 社会的な見方・考え方を働かせるための工夫

右図のワークシートは，生徒Ａの所属している第５グループが，新たな解決策を見つけ出すために行った話し合いの場で作った資料である。まず，グループで共通の住みたいまちを創り，それに向かって自分の問題解決と他者の問題解決を組み合わせ，新しい問題解決を発見する場である。

このような学習過程を手立てとして設けることによって，社会的な見方考え方をより広く深く，多面的多角的に使うことができる。そして，主体的な学び，対話的な学び，深い学びが実現できたと考える。



（図２：住みたいまちのイメージマップ）

◆グループで話し合って，グループの「住みたいまち」を１つ創って下さい。

生徒Ａ，生徒Ｂ，生徒Ｃ，生徒Ｄ＝第５グループ

安心・安全で観光客の多い，笑顔と活気あふれるまち

◆自分の問題解決と，他の人たちの問題解決を合体させる話し合いをすることにより，新しい社会的な見方考え方を見つけ，自分の問題解決に役立てよう。

生徒Ａ＝領域（観光）
　玉造温泉の観光客が減少している。情報の多いインターネットで広める。

生徒Ｂ＝領域（生活）
　居酒屋の料理の量が少ない。スピードが遅い。問題として「食で笑顔」になれる町。

生徒Ｃ＝領域（生活）
　事故のない安全な町。解決法がたくさんあっていいと思いました。

生徒Ｄ＝領域（生活）
　和菓子の店と観光地の近くに創るべきべき。
　→もっと松江の和菓子を知ってもらう。

挑　　戦

◆誰の問題（解決）＋誰の問題（解決）＋・・を合体させたチャレンジ案か。どのようなチャレンジか。

○　観光客の多い，松江城に玉造温泉のマップを置く。→　どちらも観光してもらえる。
○　松江駅付近だけではなく，玉造，松江城などでも和菓子を食べられるように。
○　玉湯町の危険なところをマップにする。→　松江市役所に改善を要望する。

⑶ 分析と考察

社会的な見方・考え方を使って，問題解決をすることができた。じっくりと自分の現状の解決策を調べ，自分の解決策と比較・関連させて別の解決策を生み出すことができた。また，フィールドワークという経験からスタートした問題解決学習であったため，意欲的に学習することもできた。

今回さらに別の領域の生徒と話し合いを持つことにより，自分の領域内でしか考えていなかった解決策を別の視点から別の方法を使って，新たな問題解決を導き出すことができた。これは，今まで考えもつかなかった発想を導き出すことになった。

最終的に，松江市役所まで巻き込むような行動目標もできた。これは，総合的な学習の時間で実際に社会貢献する時に役立つ学習結果である。玉造だけの問題を松江市の問題として取り扱うことができ，国宝である松江城の知識も入り，観光客数の増えている松江城と玉造温泉をセットにして考えることもできるようになった。主体的な学び，対話的な学び，深い学びができ，問題解決能力が育ったと考える。

5　おわりに

子どもたちが，主体的に問題を見つけ解決する学習ができた。つまり，身の周りの問題についてグローバルな問題まで，主体的協働的に解決策を導き出すために，社会的見方・考え方を使って，多面的多角的に問題を論じる能力や方法を身につけることができたことである。この研究の成果を存分に発揮することのできる単元を考え，より効果的に「問題解決能力」を育てていきたい。

（文責　岡田　昭彦）